

〔萬葉集春十雜歌〕詠花

毎年トシハニツク梅者ハナノサケ開友サケドモク空蟬ウツキ之ノ世人ヨロヒト君キミ羊蹄シ春無ハルナカ有來リケ

〔萬葉集十九〕詠霍公鳥并時花歌一首并短歌略○中

毎年トシハニツク爾來ニキナク喧毛ナクモ能由ノユエ惠霍公鳥ホトギスキタ聞婆キコタ之ノ努波ヌハ久不相クハスヒ日乎ヒヲ於保美ホミ等ト每年トシトシ謂之イフ之ノ乃波ニハ

〔萬葉集十五〕中臣朝臣宅守與狹野茅上娘子贈答歌略○中

安良アラタ多麻能タマノ等ト之能ノ乎ナ奈我ナガ久安クア波射ハサ禮レ杼家ケシ之伎許キコ己コ呂乎ロヲ安我アガ毛波モハ奈久爾ナクニ

〔新勅撰和歌集冬六〕五十首歌よませ侍ける時、年の暮をおしむといへる心を、

入道二品親王道助

とゞめばや流れて早き年波のよごまぬ水は玄がらみもなし

〔古今和歌集春一〕ふるとしに春たちける日よめる

年の内に春はきにけり一とせをこそとやいはんことしとやいはん

〔後撰和歌集十五〕小野よしふるの朝臣にしのくのうてのつかいにまかりて、二年といふとし、

四位にはかならずまかりなるべかりけるを、さもあらずなりにければ略○中

源公忠朝臣

玉くしけふたとせあはぬ君が身をあけながらやはあらんと思ひし

〔伊勢物語上〕昔男かたゐる中に住けり略○中 此戸あけ給へとた、きけれど、あけで歌をなんよみて

いだしたりける

あら玉の年の三とせを待わびてた、こよひこそ新枕すれ

〔躬恒集〕みの、すけのくだるに送る

ひと日だにみねば戀しき君がいなば年のよとせをいかですぐさん